



THE BAJ NEWS

日本ボストン会 | Boston Association of Japan | 会報 : 61号

レクチャーシリーズ

Youtube動画配信

レクチャーシリーズのYoutube動画配信をいたします。右のボタンをクリックしてください。

第6回：辻 篤子
テーマ：日本の科学技術はダメなのか？



第7回：畑 正高
テーマ：ボストンとの交流 香の道具に導かれて



尚、このYoutube動画は、日本ボストン会会員並びにレクチャー参加者のみが閲覧できるように限定公開になっています。

URLの拡散並びに部外者への提供は控えて頂けますよう、よろしくお願い致します。

ご質問等がありましたら、右のボタンからご連絡ください。



今後のイベント



日本ボストン会HP

<http://www.j-boston.org/>

日本ボストン会事務局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲
2-14-1 (株)日本レーザー内



ボストンポップス演奏者と

30周年を迎えて

—日本ボストン会の過去・現在・未来—

藤盛 紀明

日米交流の歴史は日本とニューイングランドの歴史から始まる。そのためボストンを中心とするニューイングランド地方には日本との古い関係を示すものが数多くある。私が参加していた米国のボストン日本人会に、灯ろう等の古い日本美術品の修復基金の援助の申し入れがあったが、資金不足で応えられない事があった。これを契機に日本に日本支部のような組織を作って、日本から支援する体制を作ってはとの提案がボストン日本人会の役員会（当時の吉野耕一会長発案）でなされた。1991年初めに帰国する藤盛がその役割を担うことになった。色々苦難があり作業が難航したが1992年6月に土居陽夫さんが帰国して参画、土居さんの努力で一気に進み、同年10月に日本ボストン会が発足した。会の活動は日米文化交流を基軸に据え、会員相互の語らい

の場とすることも確認された。日米の両ボストン会組織は密接な協力関係を維持し、日米友好の架け橋の一端を担うとするものであった。

発足当初、最も活躍したのは「レディース会」であった。「ニューイングランド音楽院」「パークリー音楽大学」卒業生を迎えてクラシックやジャズの演奏会を度々開催した。その流れは関直彦・尚子ご夫妻のご自宅で開催され続けた「音楽の会」に引き継がれた。しかしこの会もご夫妻が高齢になられて今は終了した。日米交流促進の一環として「ボストンの先生のホームステイ受け入れ」「ポーツマス条約ゆかりのホテルに保存基金寄付」「ボストン桜の木記念植樹10周年桜の苗木寄贈」など数多くの活動を行ってきた。藤崎博也先生提案の『日本・ニューイングランド交流の記録』、三好彰さんが精力的に調査研究し発表された『ボストン日本人学生会の記録』など日米交流史を彩る出版も多く行われた。「お花見の会」は会の初期から実施されたイベントで、「里帰りツアー」などボストンからの参加者も多数おられ、現地との交流に大いに貢献した。桜開花時期と日本訪問時期の調整は大変で、桜が咲いていないお花見、散り際のお花見などエピソードは多い。「歴史を飲もう会」は日本に残るニューイングランドゆかりの場所を訪問する会として始まった。岡倉天心設計の五浦六角堂訪問とアンコウ鍋会食の一泊二日の旅は記憶が鮮明



2011年11月 20周年総会

である。この会も「美術の会」と合併して「美術と歴史の会」となった。「美術の会」は名古屋ボストン美術館訪問など多彩な活動を続けた会であった。

「ゴルフの会」の第1回は1995年5月千葉県泉カントリー倶楽部で開催された。開催コースは色々選択されたが、山崎恒氏

の担当となり川崎国際生田緑地ゴルフ場開催が定例化した。その山崎さんも亡くなられて「ゴルフの会」も中止された。「ハイキングの会」は関東近郊を数多く散策したが、「紅葉狩りの会」と合併して「ハイキングと紅葉狩りの会」となっている。会報発行を一人で担当されてきた俣野善彦も亡くなられ、現在は電子会報として土居氏に引き継がれている。

2005年に作成された会の会則（案）の（目的）には「本会は、わが国と歴史的にも関係の深いニューイングランド地方との交流を促進し、日米友好の増進に寄与することを目的とする」と記されていた。（活動）には（目的）に沿った活動が記されたが、（5）に「会員の友好親睦のために同好会を行う」とある。既に述べたように会創設



2015年10月 紅葉狩り・角館

当初の活動は主として（目的）に記された「ニューイングランド地方との交流を促進」であったが、次第に（5）の活動のみとなった。その理由は創設時の幹事がそのまま留任したためである。会の今後を議論するために、企画委員会が設置された。メンバーは土居、近藤宣之、佐藤信雄、鶴正登、藤盛で、議論の結果「ニューイングランド地方との交流」を再起動させるために幹事を一新することとした。従来幹事会に参加していたメンバー（会の顧問を含む）は、「シニア会」を設置し、従来通り友好・交流・歓談を続けることにした。このような会の新しい流を創るきっかけとなった細田満和子さんが新会長に、ボストン在住の八代江津子さんが次期会長候補となられた。是非お二人に日本ボストン会の再スタート、新メンバー増強をお願いしたい。

活動報告

お花見の会「小田原城址公園お花見と漁師めし食堂ランチ」

小野田勝洋・富子、生田英樹

お花見の会は2019年春に飛鳥山で開催した後、新型コロナ禍により、2020年、2021年、2022年と開催できず、この間、毎年順延を続けてきました。2023年になって、規制も緩和され、やっと開催にこぎつけることができました。

飛鳥山開催の後、次の開催場所は小田原城址公園と決めて、何度も下見を繰り返しました。またコロナ禍の間も、毎年下見を続け、何とか今年はやれるのではないかと抱き続けましたが、安全を考えると無理との結論が毎年のことになり、順延を続けました。

お花見の会は1997年の春、藤盛さんにより始まりました。この間2011年春は東北大震災のために自粛、という事態となりましたが、それ以外は毎年開催されてきました。今回のコロナ禍のための3年間に及ぶ中断は異例のことです。



久しぶりのお花見の会ですので、皆様に忘れられたのではないかと心配しましたが、参加者は15名と、多くの方々に楽しんでいただきました。（参加者：土居さんご夫妻、酒井さんご夫妻、三好さんご夫妻、中埜さんご夫妻、小野田幹事夫妻、森さん、水野さん、篠崎さん、島田さん、生田幹事 計15名）

桜の満開時を予測するのはとても難しいことです。そして温暖化の影響でしょうか、毎年それは早くなっています。今年は3月24日金曜日と決めました。満開にはちょっと早いという感じでしたが十分楽しめました。

午前11:00小田原駅前待ち合わせ、駅前から遠望できる小田原城へ向かいました。まずは小田原城お堀端の桜並木の所でみんな集まり、集合写真を撮りました。

赤い欄干の学橋から、桜を楽しみながら、二の丸広場（NINJA館がある）を通り、イヌマキの大木を左に見て、常盤木門（SAMURAI館がある）を通り、本丸広場に入りました。左手に巨松が並び、正面の天守閣とそれをバックにした桜の古木は写真スポットです。



天守閣入り口への階段を上がりました。そこからの見晴らしはなかなかのものです。本当は天守閣の中へ入り、展示物を見学し、最上階展望台から小田原一円を見渡すというのが理想的でしたが、時間の関係でそれは割愛しました。

天守閣横の御用米曲輪を見ながら、天守閣裏手に回り、子供遊園地横を通りました。天守閣と桜の組み合わせは、どの位置から見ても素晴らしいものです。小峰曲輪から報徳二宮神社横を通り、

南曲輪、郷土文化館横からビヤクシンの前を通り、お茶番橋を通り、藤棚に至り、そこから予約のタクシーで早川漁港の「漁師めし食堂」へと向かいました。途中幹事の勘違いがあり、小田原漁港のTOTOCOへ立ち寄ってしまうハプニングがありましたが、何とか無事到着し、漁師ランチを楽しみました。ランチの後は海産物のお土産選びを楽しみました。そこから漁港風景を楽しみながら早川駅に出て、解散となりました。

皆様、久しぶりのお花見の会を楽しんでいただけたことと思います。今回時間の関係で少々駆け足での小田原城でしたが、これを機に小田原に再来いただきゆっくりと楽しんでいただければと思います。

なお、お花見の会は今回をもって最終回といたします。幹事の高齢化、お花見の時期を見極めることの難しさ、当日の天候予測の難しさ、それに伴うランチの会場の予約の大変さ等がその理由です。歴史あるお花見の会を閉じるのは残念ですが、ご理解いただきたく思います。

お花見の会の記録は以下をご参照下さい。

1) 日本ボストン会会報51号 2018.10.01発行 「寄稿：観桜会（お花の見会）誕生からの記録」 生田英機 231011)お花見の会小田原城.docx

2) 冊子「日本ボストン会 お花見の会」（小野田勝洋作成）

レクチャーシリーズ第6回

岩田 衛・加奈子

レクチャーシリーズ第6回は4月22日に行われました。講師は「辻 篤子」様、題目は「日本の科学技術はダメなのか？」でした。辻講師が示された講演概要は次のとおりです。

“このところ、日本の科学界をめぐるニュースといえば、「注目される論文数が減って日本の存在感は国際的に低下する一方」「博士課程への進学者も減少」などと暗いものが多い。ロケットの失敗も続いている。先行きには暗雲が漂っていると言えそうだ。そこで、大学に巨額の資金を投じて立て直しを図ろうと、国際卓越研究大学の公募が行われ、10大学が手を挙げたところだ。博士課程の学生を支援するさまざまな取り組みや、ベンチャー支援も強化されつつある。ダメなのか、いや、ダメではない、と言いたいところだが、どうだろうか。科学記者としての第一線の取材現場から離れて久しい身ではあるが、これまでの取材経験もふくめて考えてみたい。”

日本ボストン会の会員は、ある時期にボストン近辺の大学への留学、企業駐在などをした方々とそのご家族から成り立っています。今日の講演内容は、多くの会員が思っていることを、統計データなどを踏まえて明確に述べられ、大変勉強になりました。

日本の研究力の低下は何故なのかという疑問に対して、辻講師は次の3点を挙げられました。1) 企業の基礎研究からの撤退。2) 博士課程修了者のキャリアパスの不安定さ。3) 大学教員の業務量の増加。

質疑応答では、日本の高等教育には様々な課題があり、特にグローバルの視点からは問題が山積していることが話されました。米国等への海外留学生の減少は今回のテーマに関連した大きな問題です。事後のアンケートから、「統計的な指標をベースとした辻講師の説明は、現状を知る上で役立った。」「今後、日本が研究・技術力を発展させるための改革・方向性について、このテーマをさらに深掘りしてみてもどうか。」「中国やインドが大人口とともに大きく伸びていくときに、日本の取るべき道はどのようなものか。」などが挙げられました。

辻講師は、朝日新聞において科学部、アエラ発行室、アメリカ総局などで科学を中心とした報道に携わり、MIT/オックスフォード大学フェローを経て、論説委員として社説を担当。現職は名古屋大学国際機構特任教授です。

レクチャーシリーズ第7回

岩田 衛・加奈子

レクチャーシリーズ第7回は8月19日に行われました。講師は「畑 正高」様で、題目は「ボストンとの交流、香の道具に導かれて」でした。畑講師が示された講演概要は次のとおりです。

“マサチューセッツ州Newtonの一人の日本美術愛好家の手元に、美しい蒔絵の「十種香道具箱」が二組ありました。「どの日本人に尋ねても、その使い方を知る人に出会えない。誰かいな

いのか？」という素朴な彼の疑問が縁となって、まだ20歳代だった私がボストンを訪問することとなりました。二組もの美しい蒔絵の香道具に出会えて、とても興奮したことを覚えています。細かな道具の使い方を説明すると「お茶会はボストンでも体験できる。ぜひ、香の会を計画しよう」と話がまとまり、二度目の訪問へと発展しました。その後40年、香の文化が、草の根交流を広げてくれています。”

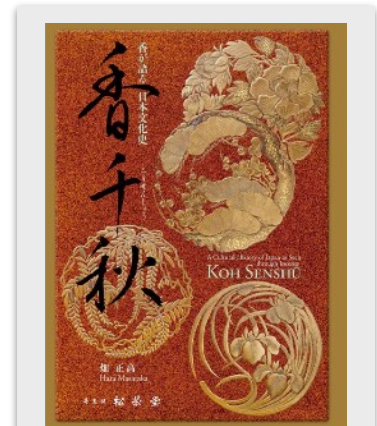
畑講師は、京都に本店を構える松栄堂の主人（社長）です。家業の松栄堂は、約300年前に京都に創業し、現在まで香づくりに専念しています。宗教用の薫香をはじめ、茶の湯の席で用いる香木や練香、お座敷用の線香や手軽なインセンス、匂い袋など、多種多様な香りを提供しています。

香文化の継承者として、畑講師の講演は深い造詣に基づいており、特に「聞香」や「組香」といった初めて聞く言葉に触れ、それがボストンでのStudy Groupで実践されていることに感銘を受けました。畑講師の指導で香りの奥深さを学ぶ日本美術愛好家、Rod Smith氏の写真も印象的でした。

また、畑講師は長年にわたり京都の祇園祭で長刀鉾囃子方を務め、京都とボストンの姉妹都市55周年を機に、ボストンでその実演を披露したエピソードも紹介されました。

事後のアンケートでは、「お香とは匂いを楽しむものだと思っていましたが、心を傾けて香りを聞くものだという新たな知識を得ました。」「畑講師の話は文化や歴史に根ざしたもので、非常に興味深かった。」「畑講師が国際交流を通じて日本文化を広めている姿勢に感銘を受けた。」などのコメントが寄せられました。

畑講師は、大学でも教鞭をとり、深い日本文化の知識を持ち、その知識を世界に広める一翼を担っています。また、文化庁長官賞を受賞された功績もあります。



江戸時代から十二代続く京都の香老舗に生まれた著者が、100年ごとに時代を追って、香を軸に日本文化を見つめます。

著者：畑 正高
訳者：マイケル ジャメンツ

シニア会

鶴 正登（総務担当）

第2回会合を2023年5月27日（土）12時から26名の出席を得て東京三田倶楽部で開催しました。

藤盛会長のご挨拶に続いて、第1回会合以降亡くなられた俣野善彦さん、山崎恒さんを偲んで吉野さんのご発声で献杯。

食事・歓談の後、関尚子さんによる素晴らしいバイオリン演奏、中埜岩男さんによる興味深い講



話を楽しみました。

その後引き続き食事・歓談。何人かの方から近況や今思うこと等を語って頂き、最後に記念写真を撮って午後2時過ぎに散会しました。

音楽の会「時を越えた日米交流～ボストンポップス特別コンサート/懇親会」

若尾美絵 (ボストン在住)

秋の気配が一段と深まった9月最後の週末。シンフォニーホールでは、数週間後に迫った日本公演と同じプログラムで、ボストンポップスコンサートが開催されました。完売日も出るなど大盛況のうちに終演しましたが、その有志メンバーが日本滞在中、当会の為にプライベートコンサートをして下さるといので、この数ヶ月、細田会長を中心に実行委員会を立ち上げ、準備を進めてきました。



私は主に、メンバーとの打ち合わせや、コンサート内容をまとめたフライヤー製作を担当しました。

時を同じくしてボストンでは、有志メンバーの皆さんが、リーダーのホルン奏者ケヴィン・オーウェン氏を中心に、多忙なスケジュールをやり繰りして本番に向けたリハーサルを繰り返しており、その熱心さには感心しきりでした。(オーウェン氏と日本ボストン会の出会いについては、前音楽の会幹事、関直彦さんが詳しく書いて下さっていますので、ご参照ください。)



ケヴィン・オーウェン氏

それにしても前回2003年のボストン・ポップス日本公演の際、当会で演奏されたケヴィンさん達は、20年の時を経て関さんご夫妻に連絡をしてこられたのですから、彼らの熱意と当会に対する想いは、並々ならぬものなのでしょう。

実際、ケヴィンさんは、こう仰っていました。「ボストン会の皆さんは毎回、私達を温かく迎えてくれ、日本滞在が何倍も楽しく充実したことが忘れられない。思い出は20年経っても鮮やかですよ。」

これまでの日本ボストン会と音楽の会の運営が真の国際交流を紡ぐ、心を通わせるものであったことに改めて敬意を感じた次第です。

折しも30周年記念の年、コロナ禍を経て、対面イベントを以前のように復活させる良い機会として、幹事会、事務局が一丸となり開催することになったボストンポップスプライベートコンサートと懇親会です。出演者、お客様、関係者皆様の心に、未来に繋がる何かを残す、有意義なイベントになりますことを願っています。

伝統芸能の会

滝沢典之

2023年10月22日（日）に4年ぶりに伝統芸能の会主催の国立劇場歌舞伎観劇会を開催いたしました。この歌舞伎公演を最後に、国立劇場は建て替え工事のため、2029年まで閉場いたします。

「未来へつなぐ国立劇場プロジェクト 初代国立劇場さよなら特別公演 令和5年度（第78回）文化庁芸術祭主催公演」という特別な公演を会員29名が観劇いたしました。

演目は「近松半二＝作 通し狂言 妹背山婦女庭訓 三幕四場（いもせやまおんなていきん）」です。藤原鎌足／豆腐買おむら（中村時蔵）、杉酒屋娘お三輪／采女の局（尾上菊之助）、宮越玄蕃（坂東彦三郎）、烏帽子折求女 実ハ藤原淡海（中村梅枝）、荒巻弥藤次（中村萬太郎）、入鹿妹橘姫（中村米吉）、大判事清澄（河原崎権十郎）、漁師鱧七 実ハ金輪五郎今国（中村芝翫）、蘇我入鹿（中村歌六）ほかの豪華な歌舞伎役者の演技を堪能いたしました。好評の舞台裏見学も多くの会員が参加されました。以前は舞台下の見学もできましたが、今回は安全上の都合により、舞台上のみの見学になりました。参加された皆様は、国立劇場との別れを惜しんでおられました。今回、京都からジャメッツ様ご夫妻も参加され、また、ボストンからも3名の方が日本滞在中ということで、参加されました。最後に記念のお土産（クラフトビール）をいただき、笑顔で帰途につきました。

長年お世話になりました、独立行政法人日本芸術振興会元理事長、日本ボストン会元会長の茂木様にこの場をお借りして、感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



2029年新たな国立劇場が完成するまでの間は、別の劇場での観劇会を開催したいと思います。会員の皆様には引き続きのご支援をいただけますようお願い申し上げます。

活動予定

総会

別府 雅道

日時： 2023年11月27（月） 18：30～

場所： NEC芝倶楽部（対面）およびZoom（後日招待状をお送り致します）

会費： 5,000円～6,000円/人（予定）

ハイキングと紅葉狩りの会

幸野 眞土、鶴 正登、鶴 経子、中埜 岩男、中埜 紀子

新型コロナウイルスの影響で紅葉狩りも3年間お休みになっていましたが、今年はマスクも取れて、久しぶりに野外活動を楽しめる環境が整いました。活動再開の記念すべき紅葉狩りとして、予てより温めていました深大寺と神代植物公園の紅葉狩りを実施することになりました。

今秋は夏の猛暑と長引いた残暑の影響で秋の深まりが遅いので、丁度紅葉の見ごろの紅葉狩りを楽しめるのではないかと期待されます。

1. 実施日時：

2023年12月2日（土） 10:00～15:30

2. 集合時刻と場所：

12月2日10時(厳守) 京王線の調布駅中央口改札を出たところ

全員が集合次第、中央口から広場口の京王バス(11番乗り場)に移動し、深大寺行き京王バスに乗車、「神代植物公園」にて下車

3. 紅葉狩り鑑賞場所

神代植物公園（深大寺に隣接）

電話：042-483-2300 〒182-0017 調布市深大寺元町5-31-10

【入園料】一般 500円 65歳以上 250円

4. 散策概要

神代植物公園正門から入園、バラ園を通過してかえで園に行き、かえで園の紅葉狩りを楽しみます。次に、つばき・サザンカ園を散策し、深大寺門から植物公園を退園します。緩い坂道を下って深大寺境内に南門から深大寺に入ります。深大寺は奈良時代奈良時代(733年)水の神である「深沙大王」をまつる寺として開かれました。釈迦堂には平成29年に国宝に指定された東日本最古の国宝仏である釈迦如来像があります。元三大師堂・本堂に順にお参りし、最後に梵鐘

を見てから東門を出ます。東門前の矢田部茶屋に入り、昼食をいただきます。「深大寺蕎麦」は江戸期より寺の名物としてその名を知られています。

5. 食事会（昼食）

食事：（そばコース料理2,310円+飲み物） 会場：矢田部茶屋（深大寺東門前）

参加見込み人数：約15名

6. 持ち物

飲み物、健康保険証、寒くなる場合は防寒具もご用意ください。

7. 参加申込み

2023年11月27日(月)までに中埜岩男(nakano-family@s7.spaaqs.ne.jp)宛、お申し込みください。不明な点は、中埜自宅03-3790-5069 又は携帯 090-5123-8268 にても対応させていただきます。

8. 参考資料

深大寺と神代植物公園のパンフレットは当日配布いたします。

深大寺ホームページ： <https://www.jindaiji.or.jp>

神代植物公園ホームページ： <https://www.tokyo-park.or.jp>

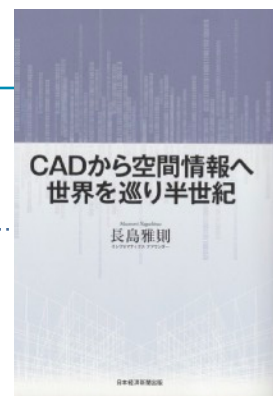
レクチャーシリーズ第8回

岩田 衛・加奈子

次回のレクチャーシリーズ第8回は次の予定です。

講師: 長島雅則、タイトル: 未定

日時: 2024年春（詳細未定）



長島雅則氏近著

音楽の会

若尾美絵

音楽の会は、ボストンポップスの会がありましたので、年内は予定しておりません。

来年は、ボストン-京都姉妹都市提携65周年にあたり、音楽の会でも関連企画を考えています。日本ボストン会会員で、京都出身或いは在住の演奏家で出演可能な方がいらっしゃいましたら、是非、音楽の会までご一報ください。

シニア会

鶴 正登（総務担当）

次回会合の日程は未定です。

寄稿

ボストンで見た風景

道井 緑一郎

2016年8月から2019年3月まで在ボストンの日本国総領事として勤務させて頂き、皆様には大変お世話になった。そのお礼を込めて、言わばボストンの風景画として、記憶に残ったエピソードの幾つかを、記させて頂くことにしたい。なお、赴任早々、某大学の先生にあなたは17代目の日本のボストン総領事だと言われた。自分ではカウントしたことがなかったが、そういうことが先方からすらすら出てくるのには驚いた。

着任して間もない頃で思い出すのは、2016年大統領選が佳境に入っており、トランプ候補がイングステートのニューハンプシャー州に来るというので同州での共和党党员集会に参加してみた際のことである。会場内での集会の実際の様子と同党员集会のことを取り上げた翌日の報道内容は大きく異なり、報道内容を鵜呑みにできないことを改めて認識した。これはボストン在勤の約20年前に米国に在勤した際と、米国社会で大きく異なっていることの一つだった。このこともあり、選挙結果は広く報じられていることとは異なることになる可能性があると思ったが、その後、実際にトランプ大統領が選ばれ、2020年の大統領選挙を経て現バイデン政権となり、今また来年の大統領選挙に向けた政治の時期に入りつつある。米国の状況は、米国内政のみならず、国際情勢に影響を与えていることはウクライナ、パレスチナの状況をはじめ、言うまでもない。



なお、レモンド・ロードアイランド州知事やウォルシュ・ボストン市長など当時お目にかかせて頂いたニューイングランドの関係者が、その後バイデン政権の閣僚入りしており、ボストンはワシントンの政治の後背地ということも変わっていない。

政治の話から入ったが、ボストンといえば、学術、サイエンス、教育、芸術・文化、スポーツ、、、と様々な分野で輝いていることは言うまでもない。ある日、公邸で開いたレセプションの際に、（意図したわけではなかったが）ノーベル物理学賞受賞者の方が4人もおられたのには驚いた。因みにその内のお三方に、超ひも理論についてどう思うか聞いたら、その反応に今そうした理論を探求されている方々との世代の差のようなものがあることを感じ、面白かった。

ゲノム研究で世の中をリードするブロード・インスティテュートのエリック・ランダー所長（当時）との懇談では、昔、同所長がまだ余り知られていなかった若かりし頃、表参道を夫妻で歩いていたら、通りかかりの日本人に、あなた外国人ですか、英語の練習に付き合ってくれと言われて、見も知らぬ日本人と近くの喫茶店で英会話した、というエピソードを楽しそうに話してくれた。このように、今時点で日本との直接的な関係が必ずしもなくても、心の中で日本のことを好

きでいてくれる人々は大変多い。因みに、当時、ランダー所長は、ゲノム技術を使った創薬と塩基配列は判明しているものの役割が不明である大多数の配列の解釈（実際にどのような役割を負っているのか）がインスティテュートの二大任務と言われていたが、建物は外から見ると単なるオフィスビルのようなのだが、一步中に入ると最新鋭のシーケンサーがびっしりと並び、壮観だった。

ブロード・インスティテュート自体、MITとハーバード大学が共同で設立したとのことだが、大学間協力ということでは、マサチューセッツ州のど真ん中、西マサチューセッツの広大な自然



の中に、5大学共同コンピューター・システムがある。ボストン大都市圏には世界トップレベルの大学がひしめいているが、各大学がそれぞれコンピューターを調達するのではなく、協力して共同のコンピューターを建設したら、より巨大なコンピューターが導入できる。ある一人がこのアイデアを提案し、競争者でもある各大学の間には当初抵抗もあったとのことだが、結局この構想に5大学が賛同し、共同コンピューターが建設された。西マサチューセッツの現地

に見に行ったが、文字通り巨大なコンピューター施設が森林地帯の中にある。大学のあり方、大学間の協力という意味で示唆的で、考えさせられた。

MITの卒業生が新たなコンセプトの工科大学を作ること考え、設立されたオーリン工科大学という大学がボストン近郊のニーダムにある。そこでの取り組みもユニークだった。マサチューセッツの北の方にレイセオン社の工場があるが、ミサイル本体の基本的な開発は勿論同社で行うのだが、例えば一旦開発されたミサイルの改善改良をオーリン・カレッジが受注し、それを授業の題材にする、それも大学院になったらというわけではなく、学部レベルからやると言っていた。産学連携という言葉は日本でも長らく言われている言葉だが、ここの産学連携は文字通りの連携だった。同大学のミラー学長はこれをプロジェクトベースの教育と呼んでいた。

サイエンスのことを書いていなくてもきりがないのであるが、ハーバード大学の工学部長が同大学の工学部を大幅増設するという方針を自分に説明してくれた時、その理由として、今は情報技術の時代とはいっても、これからはやはり製造技術を持っている必要があると述べていたのだが、米国人をしてこのような認識を持っているということが大変印象的だった。これは日本にも完全に当てはまる話だろう。



話題を変えると、有名なジョン万次郎の米国滞在（1841年）のかなり前に、米国側から日本に来訪し上陸までしていた米国人達がいたことは、恥ずかしながらマサチューセッツの現地でも知ったことである。1791年、キャプテン・ケンドリックに率いられた米国船グレイス号が和歌山県串本町にやってきて、水、薪等の補給のため上陸し、漁村の村人側も船員達に勝手にそうし

たものを持っていかれるのは困るが、むしろ友好的に交流して、彼らを歓迎したというのである。とは言え、やがて藩の知るところとなり、湾内に二週間停泊した後、船は日本を後にしたとのことである。藩のお咎めを受けるまで、村人は友好的に交流した、ということがrevealingで面白かった。こんなことまでわかるのは、当時の船の航海日誌そのものが残っているからである。江戸時代の外国との交流について、米側からの資料で、それまで見えていなかった姿が浮かび上がってくるのは、得難い経験の一つだった。



歴史のことが出た関連で、ボストン美術館のことについて触れておくと、いろいろな見方是有り得るが、兎にも角にも日本の素晴らしい美術品が残っていること、最高の保存環境できちんと保管されていることは、ありがたいことであった。また、同美術館による美術品修復への取り組みも素晴らしかった。

総じて、日本の文化・芸術についてこれ程のめり込んでいただいているのかと思う米国人の方々がボストン界隈に数多くおられ、また、自分自身、それらの方々を通じて逆に日本の文化を学ばせても頂いた。茶道にしても、華道にしても、今までで最も触れさせて頂いた時期であった。

音楽も、ボストン交響楽団は言うに及ばず、NECやパークリーカレッジ、また、教会などでのコンサートなど、素晴らしい環境にある。まったくの私事だが、シャルル・ミュンシュ指揮ボストン交響楽団の運命はいまだに自分にとってのスタンダードである。音楽ということでは、あるプレゼンテーションで、宇治の平等院鳳凰堂の構造図を元に、そこで当時如何なる音、音楽が鳳凰堂で奏でられ、どのように響いたであろうかという研究を聞かせてもらったことがあったが、それを日本人ではなく米国人の研究者の方が取り組んでいることには驚く思いがしたし、そういった場が常にあるのはボストンならではであった。

本稿では、すべての方々を書けないので、特に日本の皆様の個人名はあえて触れさせて頂いていないが、分野を問わず、広く交流が続くことを願うものである。

こうした中で、2016年-2019年当時、現地でどうしても気付かざるを得ないのが、日本からの留学生他の大幅な減少であった。これは分野を問わず広く生じており、このことは大学のどの学部へ行っても、政治学部でも、物理学部でも、建築学部でも大学関係者より言われた。実際、マサチューセッツ州側の統計によっても、当時の同州・ボストン大都市圏への海外からの留学生の出身国は1位中国、2位インド、3位韓国、4位カナダ、5位サウジアラビア、6位台湾、7位ブラジル、8位ベトナム、9位トルコ、10位英国であり、上位10カ国に日本は入っていない。何も日本人が皆留学する必要があるとは思わないが、一定数の日本人が海外を知っていることは、学術の力、競争力の維持強化、世界の現状を正しく把握する観点から必要であり、また、そうでないことは危険ですらあると危惧された。欧州はエラスムス計画等で積極的に学部生に出身国以外への留学を奨励しているのとは大違いである。

ハーバード大学で当時量子物理学センターをオープンしたジョン・ドイル教授は量子の基礎についてホワイトボードに図解して説明してくれた後、センター内を案内してくれた。多くの院生の方が機材を使って研究されていたが、原子を整列させているのだということだった。同教授は日本との交流強化にずっと取り組んでこられた先生だが、そのセンターにも残念ながら日本人はいなかった。

海外における日本人、日本のプレゼンスの減少は様々な波及効果を及ぼす。日本の歴史問題研究では5本の指の一人に入ると思われるボストン・カレッジの先生が自分に対し、「アメリカ人一般の中における日本の認識がフジヤマ、ゲイシャの時代に逆行しはじめている」と述べたことはいまだに忘れられない。これは米中対立が顕在化する前の時点でのことではあったが、日本人で実際に国外にプレゼンスし、交流している人数が減少していることへの警鐘であった。日米関係の重要性は戦後の歩みの中で日米双方の意識にしっかりと根付いていると期待する一方で、こうしたことは、常に芝刈りをしなければ庭は草坊坊になって、雑草地になっていくのと同じで、継続的な関与とインプットが必要である。内向き思考で国内に閉じこもっていると、気付かないうちに、国際社会における日本のプレゼンスの低下とそのことへの自己認識の欠如を生む。

こうしたスパイラルの一事例として、現地における中学高校大学における日本語教育も減っていく傾向にあった。そうした中で、最前線で工夫して日本語教育の維持に努力されている日本語教育の先生方の献身的なご尽力には頭が下がる思いであった。一方において、日本との縁を大切にしようという米側の思いに出会うこともある。例えば、マ



サチューセッツ州の州立大学の一つに、ボストンの南にあるブリッジウォーター州立大学があるが、明治維新直後の1875年、高遠藩士の子息だった伊沢修二がここに留学し、帰国後、後の東京藝術大学の礎を創立している。ブリッジウォーター大学を訪問した際、学長や先生方は、そうした日本との繋がりについて大切に話をされ、現代においても日本語教育や研究は継続したいとして、交流の強化を期待

されていた。こうした絆は是非とも大切にする必要はある。ボストンでレセプションを開催すると彼らには良く足を運んで頂いた。

残念ながら他界されてしまったが、エズラ・ボーゲル名誉教授にはご自宅にお邪魔させて頂いたりしながら、折りに触れお話しさせて頂いた。本当に頭が下がる思いだったのは、ボーゲル先生は、日本の留学生の方々を対象に自宅に呼んで、私費でお寿司などをとりながら、ボーゲル塾と呼ばれた勉強会を継続的に開かれていたことである。先生曰く、日本人はかつては松下幸之助など世界に発信できる人材を輩出した、しかし、今やそうした状況は変わり、日本人には発信力をつけてもらう必要がある、自分はそのためにこの勉強会をやっているのだ、と仰っていた。丁度先生は鄧小平の本を書かれたところで、次は胡耀邦について書く、と仰られ、中国にとって今日に繋がる大きなターニングポイントとなった天安門事件に至る展開が含まれるであろうその著作を拝読させて頂くのを楽しみにしていたが、それも叶わなくなった。



思い出すままに記させていただいたが、自分としても現地で意識させて頂いたことは交流の強化であり、ボーゲル先生が気にかけておられた日本の発信力の強化であり、日本の力を強化していく上でのヒントを得ることである。ボストンにおいて特に特徴的な事象として、スタートアップ企業を生み出し、支援するエコシステムの充実がある。マサチューセッツ州政府関係者と話すと、これは決して偶然の産物ではなく、さりとして、政策的に構想してそれを計画として実現させたということでも必ずしもなく、いくつかの複合要因の産物だと述べていたが、ライフサイエンスでは、ボストン周辺圏は全米トップのエコシステムを形成している。エコシステムの構築の必要性はその頃でも日本でも言われ、その構成要素は何かということはよく議論したが、企業支援組織の存在はその構成要素の一つである。自分もボストンに所在するそうした企業支援組織を順次回らせて頂き、その実際というものを体感するように努めたが、ある企業支援組織のトップと話している時に思ったのは、この訪問で知った内容を単に報告しても何かが変わるだろうか、交流強化に向けて実際に実効性のある取り組みをするにはどうしたらいいだろうかということであった、その時に頭に浮かんだのは、自分達領事館は直接ビジネスはしないが、この企業支援組織に領事館を入居させてもらって、自らマッチング支援や情報提供をやったらいいのではないか、少なくともそれは何らかのメッセージになるのではないかとということだった。そこで会話の最後に、相手のCEOに、あなたの活動にとっても印象付けられた、については日本領事館のセカンド・オフィスをここに置かせてくれないかと提起したところ、先方の返事は、思いの外あっさりとして、いいよ、だった。

そこで、それからオフィスに戻って本国と交渉し、一番狭い部屋でいいので、入居の予算を認めてほしいと要望した。日本の在外公館（大使館や領事館のこと）がセカンド・オフィスを開くなどというのは、前代未聞だったので、本国も大変驚いていたが、最終的にはこれを実現する運びとなり、2018年春、CICにボストン総領事館のサテライト・オフィスを設置した。以来、個々の問い合わせへの対応のみならず、そこを拠点にマッチング、日本の技術・研究・企業等の広報を目的とした様々なイベントを開催させて頂いてきた。2023年10月現在もサテライト・オフィスは継続しているとのことで、引き続き皆様に役に立つ形での活動を願うものである。



ここまで書いてきて、そう言えばスポーツのことに触れていなかった。2017年のある日、ボストンの地元ラジオに出演させてもらった時のこと—最初の質問は、レッドソックスに大谷選手は来ないのか、レッドソックスに連れてきてくれないか、だった（当時大谷選手が日本の球団を離れMLBのどのチームと契約するのかが世上注目されていた）。生放送で、突然の質問だったが、

自分からは確か、嬉しい質問だ、来てくれるといいねと答えたと思うが、勿論自分がどうこうできるものではない。その後、大谷選手はエンジェルスに入団し、歴史を塗り替える前人未到の活躍をされ、MLBが我々にさらに身近になった。最近の職務で自分の交渉のカウンターパートだったUSTRの首席交渉官は実はボストン近郊出身で大のレッドソックス・ファンなのだが、日米の交渉会合での冒頭のやり取りは、昨日は何マイルのボールを投げたとか、ホームランが何本目だとかオータニさんの活躍の話で始まるが多かった。

長くなったので、今回ご紹介できなかったエピソードは機会があれば別の場に譲りたい。ボストン着任に際し、大体半年もすれば、各分野での専門家の方々にとりあえずひとあたりお会いすることはできるのではないかと勝手に想像したが、結局、在任期間の最後までそのような感覚は得られなかった。新たな人に出会う度に、常に人の輪はさらにどんどん広がっていく。世界の都市の中でもこのような街は稀有であろう。凄い場所である。



天皇誕生日レセプションにて

「日本ボストン会」がボストンを通じた繋がりを紡いでいく場として発展していかれることを祈念して、結びとしたい。

ボストン日本人会のルーツを辿る

三好彰

マサチューセッツ工科大学で学んだ最初の日本人は福岡藩出身の本間英一郎である、1870学生年（明治3年）から4年間学んだ。なお当時の同校はボストン市内にあり、校名はボストン・テクノロジーだった。

この本間の残した資料に Constitution and By-laws of the Boston Japanese Students' Club があると長島顧問から教えていただいた。達筆な筆記体の英語で書かれた千語以上から成るボストン日本人学生会の会則の案である。日付は書かれていないが本間の在学中であると見なせる。写真はその書き出し部である。随所に推敲の跡が生々しく残っている。本資料は長島顧問がマサチューセッツ工科大学に寄贈された。

さて1875学年度から同校で学んだのは団琢磨だが、『男爵団琢磨伝』（1938年刊）に「ボストンに居た日本人学生とライジング・サン・ソシエティという社を作り、第一土曜日の晩にホテルに集まり、米国の現状や日本の将来のことども語り合うを常とし、各自の気焰も自ら高かった」とある。団琢磨は岩倉具視を団長とする米欧使節団の随員として1871年に日本を経た、そしてボストンに留まって学生生活を送った。本間英一郎の会則案をもとにこのライジング・サン・ソシエティ (Rising Sun Society) が発足したと考えられる。

ところでホストン・パブリック・ライブラリーに Charles Knapp Dillaway 旧蔵の Japanese Boston Address Book (1871-1876) というノートがある。Dillaway はボストン・ラテン学校の校

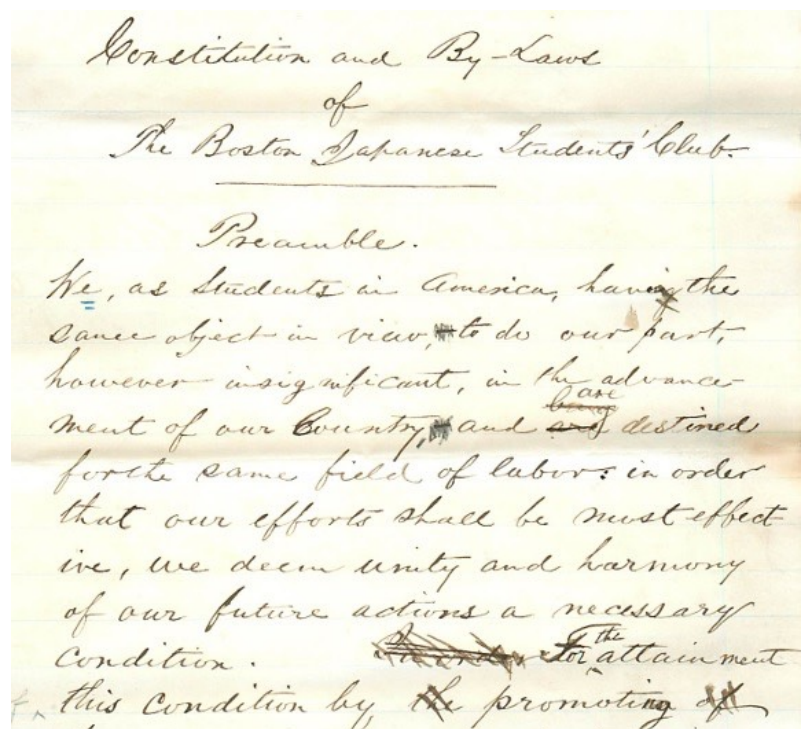
長を務めた教育者である。このノートに本間や団を含めて70人余の日本人の名前が書かれている（一部重複あり）。明治初頭の6年間にボストンにこれだけの日本人が居て、この会が生れたわけである。

さて筆者は井口顧問が企画された「ボストン日本人学生会の記録」の調査を担当した。この最初の記録は1908年11月1日の「第一例会」である。この日は日曜日なので本間の会則に沿っていないし、そもそも出席者全員がハーバード大学の学生だった。毎月第一日曜日に例会を開くこと、他の大学への留学生に声をかけることなどの会則と、会長などの役員を決めた。そして2日後にボストン日本人会が開く天長節に会長と副会長が出て敬意を表するとして議事録を締めている。このことからボストン日本人会が存在したことが分かる。なお年が明けた第四例会にボストン・テクノロジーとボストン・ユニバーシティの学生も参加した。また繰り返し開催された茶話会に多くの大学の学生が参加した。

ところでアメリカで刊行された邦字新聞や書籍にボストン日本人会が発足したという記事が見られる。たとえばニューヨークで発行された『日米週報』（1910年10月15日号）に「昨年5月にボストン日本人会が設立された。」とあり、『日米時報』（1918年10月26日号）に「ボストン日本人会設立案提議ありしが天長節前後に熟議する。」とある。またサンフランシスコの在米日本人会編『在米日本人史』（1940年刊）には「ボストン日本人会 1925年創立会員約35人」とある。さらにロスアンジェルスの新日米新聞社編『米国日系人百年史』（1961年刊）では「ボストンに、1915年に病気の時などに世話をし合う日本人共済会ができた。1920年に日本ボストン会に改組し、1941年に時局の悪化で自主解散するまで地域の中心団体として尽くした。」という。どうやらボストン日本人会は次々に生まれては消えていくことを繰り返したようだ。

筆者の調べた「ボストン日本人学生会」は戦後に復活したが人数が増えたこともあって継続していくことが難しくなり、同じく戦後に活動を再開していた社会人が運営するボストン日本人会に合流することになり1954年6月に解散した。

現在も活動を続けているこのボストン日本人会に我々は世話になった。その原点に立つのが本間英一郎の労作である。



ボストン便り -12 - October 19, 2023

八代江津子

今年のボストンの夏は連日連夜猛暑の日々を送りました。8月のお盆を過ぎたところからすこしづつ過ごしやすい時間が多くなりましたが、この所のボストンの暑さはクライメート・チェンジを否定できるレベルでは無い気がします。

すっかりコロナを感じさせない街の生活ですが、やはり罹患する人は後を絶ちません。ただ、感覚的にはインフルエンザのような扱いとなり落ち着きをみせています。

日本人コミュニティーはそれぞれがコロナの最中に方向性をしっかり見定めたかのように活動をしているように思います。日本祭も新しい会長を迎え次の時代へと突入です。

ボストン日本祭の新会長はもと外務省の外交官であり、現在ハーバードフェローをしております、光岡氏となります。どうぞよろしく願いいたします。

今までは日本祭を応援して下さったボストン会の皆様に心から感謝とともに新しい時代の報告をさせていただきたいと思います。8年間日本祭の会長を務めさせて頂き、1万5千人の祭りを7-8万人の祭りに成長することが出来たのは皆さんの応援、そして日本コミュニティーと日本文化を愛してくださる現地の方々の協力の賜物です。これからは若い力で今までの日本祭りを基礎に大きく羽ばたいてくれると信じております。どうぞ皆様に於いてもさらなるサポートを心よりお願いいたします。私は最高顧問というタイトルを頂き

これからもサポートをしていく所存です。またGlobal Japan Festival Federationを立ち上げ、世界の日本祭のプラットフォームを作る社団法人を立ち上げました。こちらでさらなるボストン日本祭のサポートを行います。



また私事ではありますが、京都府との共同事業としてボストンに京都コンセプトショップをオープンする運びとなりました。祭りを通じて日本を紹介する一年に一度の点と点、それを一本の線に変えるチャンスでもあると考え、京都府から

の提案に賛同し2024年2月に京都の文化発信基地として「Ko Kyoto」をオープンする運びとなりました。本業であるナンタケットバスケットの仕事はアメリカの文化、伝統を継承し広く伝えること、絶やさないと。私の場合は日本に伝えそれをナンタケットに還元していく活動です。基盤がある程度出来た今、日本人であるというアイデンティティから日本文化を世界に伝えたいという想いから、祭り、そしてコンセプトショップオープンとなりました。

さらなる日本-米国の交流を進めていかれたらと思います。



日本祭り第1回会議

30周年会報の編集を終えて

土居 陽夫

1992年春、5年半のボストン駐在が終わり帰国する事になった。当時ボストン日本人会の会長だった吉野さんに帰国の挨拶をすると、先に帰っている藤盛さんをサポートして日本人会の日本組織のようなものを作ってくれないかと頼まれた。藤盛さんに会いに行くと、会の設立に向け各方面とコンタクトを始めておられ、その年の10月に日本ボストン会は産声を上げた。代表幹事（後に会長と改称）が吉野耕一さん、副代表幹事が藤盛紀明さん、会計が佐藤文則さん、そして事務局を拙宅に置くことになった。

会報は俣野善彦さんが翌年の1993年4月に第1号をまとめられた。以来2014年春の41号まで俣野さんがまとめて来られた。半年ごとの出来事を的確に記録していただいているので、会報を通して当会の歴史を振り返ることができる。41号までは紙媒体で、俣野さんが印刷までされ、有志のご婦人達が青山の郵便局に集まれ封筒詰めして会員に発送していた。

幹事会で俣野さんから体調が悪く会報を続けてゆく自信がないので代わってもらえないかと、思わぬ相談があった。お受けするか迷ったが、途絶えてしまうのも寂しく引き継ぐ事になった。インターネットやe-mailも普及してきていたので、この機会に紙での発行は止め、電子メールに添付する形に変えた。送料がバカにならず、当会の支出の大きな部分を占めていたのも電子化の理由だった。電子メールの添付では受け取れないという方も若干名おられ、それは事務局で対応していただく事になった。電子化の副産物で、ページ数に自由度ができカラー化もできた。

今回第61号を30周年記念号として発行させていただく事になったので、節目としてニューイングランドや当会への思い出を有志の方々に書いていただいた。ご寄稿頂いた皆様、ありがとうございます。また活動記録や歴代の会長や幹事のお名前を載せさせていただいた。活動記録をまとめていると、毎年結構な数のイベントがあり、全てを載せるとリストが長くなりすぎるので、ワーキンググループの活動は私の主観で主なものに限らせていただいた。ボストンの教師の方々ホームステイ先は酒井さんに始まり、我が家も含め色々な方にお世話いただいたのを思い出すものの記録がなかったので、少し調べホームステイ先を追記した。歴代幹事のリストを作ると、改めてたくさんの方々へ会が支えられてきたことを思う。会長には各界で活躍されている方をリクルートすることで、当会に新たな息吹が吹き込まれたことを思い出す。

俣野さんから引き継ぎ約10年、ご指導くださった俣野さんもすでに故人となられ、私も少々くたびれが目立ってきた。そろそろ代替わりの時期かと思っている。毎回お忙しい中、原稿を提供して下さった幹事や会員の皆様には大変感謝している。またお読みいただいた皆さまに感謝している。独断での編集をご容赦ください。少しは会や皆さまの役に立ったかなと自己満足しつつ改めて皆さまに感謝申し上げます。

第2章

30周年を迎えて

回顧談

吉野耕一

30周年ということは、92歳になったのだ！

そして日本に帰国して12年になる。三浦半島の先端に近いホームには、2018年夫婦で入居、そしてあんなに元気だった静子が「さよなら」も言わずに大好きな温泉で、忽然と目の前から去って1年半にならんとしている。

日々、朝食と昼食は自炊し、夕食はホームに頼っている。共同浴場があるので、風呂掃除の手間が省けている。

日課は悪天候の日を除き、一万歩の散歩は欠かせない。数年前落語の会を立ち上げた。ピンポンの会に参加しているが、球があちこち暴れてもたちどころにホームの若手(?)がヘルプ!すこぶる平穏な日々をおくっている。

そして、米国在住の長女家族と沖縄・九州、そして次女家族と京都や温泉巡りなど趣味の旅行も継続している。そして、暮れには東京の高校で英語教師をしている孫と故郷松山への旅を計画している。

健康面では、健康診断で高血圧が判明、眼や腎臓など様々な不調の原因がどうも血圧??らしいとなり、90を過ぎてから薬のお世話になる羽目になった！

左耳が不調なのだが、普通の対話型会話には不自由しない。しかし集団の中での会話では、内容の理解が難しくなってきた。4、5年前からテレビではNHKのアナウンサーの声は聞き取れるが、ドラマなどもよく聞きとれなくなっているのを見かねて、字幕を見ることを勧められ、ストレスから解放された。しかし、会合では字幕がない！

シニア会が徐々に先細りすることは目に見えている。しかし、年に一回でも、二回でも実際にお目にかかる日が続くように、健康でいたいと思っている。

最後の入学生だった旧制松山高校、数年前に創立百年祭で同窓会の終了を決めた。それに従って東京の毎月の会も出席できる方が、3名以下になったので、自然消滅した。

コンピュータの新しいシステムやアプリに、ついていくのもめんどろになってきている。今回は、発起人として、現況を話すのも、残すのもいいかなあと、テープ起こしを了解した。



シニア会として新機軸を探っているが、自身、様々な行事への参加は難しくなっている。

昔語りで年に何回かというのも良さかなあ～

文責 ジャメンツ登三子

東下り

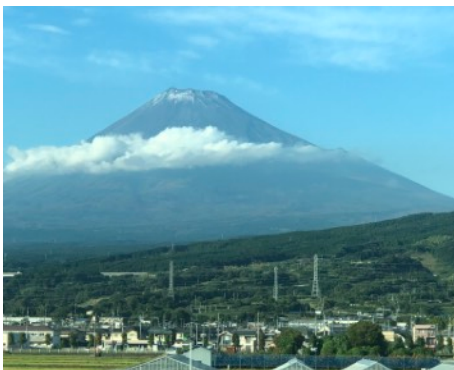
ジャメンツ石坂登三子

ボストン日本人会との出会いは、主人マイクがハーバード大学大学院の日本古典文学を研究するために転居したのを機に、私がハーバ大学で働き始め、イェンチェン図書館にハーフタイムで仕事を始めてから間もなくの事でした。故吉野静子さんと同僚となり、彼女から来年から主人が会長となるので、その秘書になってくれないか？との話がありました。私は以前住んでいたLAでも、日本人会との接点がありませんでしたし、躊躇しておりました。吉野耕一氏から直接お声がかかり、1990年岩佐幸和前会長時代から秘書としてパートタイムでスタートしました。それから怒濤のような日々が始まりました。

お二人は、「仕事をする内閣」のようなご夫婦で、振り返ってみても、1990年から1994年までの間、今までの仕事に、補習校への図書の寄付事業、婦人部の設置、『ボストンへようこそ』の出版などが加わりました。

今回、原稿を書くにあたり、会報を確認しておりましたら、日本ボストン会がスタートした1993年時代の方々の多くは、あの怒濤のような時代をご一緒した方々です。

我々夫婦は、1995年に来日し、マイクが博士論文を完成するために京都に居を構えました。そして、私は長じてボストンと姉妹都市でもある京都ボストン交流の会の仕事をお手伝いすることになりました。そして、2011年吉野夫妻が日本に戻られ、我が家もローンを完済したのもあり、ようやく、年2回の東下りで、総会出席、桜を見る会、歌舞伎鑑賞などの出席や、マイクの学会や研究旅行が年中行事になってきました。



会報の中で、とっても興味深い記事を見つけました。1993年2月、現厚生労働大臣武見敬三氏が、フェアバンクセンター客員研究員としてライシャワー邸に滞在され、マイクが発表論文英訳のお手伝いをしたこと、故榊原胖夫京都ボストン交流の会会長が2000年会報16号にご挨拶されていたこと、そして2006年27号には、故増淵興一・二代目ボストン日本人会会長がご挨拶されておられることなどで

ボストン・ポップスとの出会い

関直彦・尚子

ボストン・ポップス・オーケストラは、名門ボストン交響楽団の創立者でもあるヘンリー・ビギソンが1885年、人々にもっと気軽に音楽を楽しんでもらおうと、またシーズンオフの夏の間でも楽員に仕事を提供しようとして始めたものです。従って、基本的にボストン・ポップスのメンバーはボストン交響楽団のそれと同じで、またその中で、エスプラナード・オーケストラは海外ツアーを受け持っています。ボストン・ポップスのレコードやCDの売上がボストン交響楽団の財政面に大いに寄与してきました。ボストン交響楽団は6月に通常のシンフォニー・シリーズが終わったところで、ボストン市民がお待ちかねのポップス・シーズンが始まります。そして日本へも・・・。

2001年の初夏のこと。尚子の姉夫婦が幹事を務めている日本モーツァルト協会が、ボストン・ポップス・エスプラナード・オーケストラのメンバー有志を招き、演奏会とレセプションを催すことになり、私達夫婦も招かれて出席しました。その際、ホルン奏者のケビン・オーウェン氏と歓談した時に、日本ボストン会について紹介したところ、そういう会があるなら、空いている晩に遊んでいるよりも、ボストン会の会員たちと交流を図る方が有意義なので、有志を募って演奏会を無償で催してあげる、と有難い申し出がありました。



当時、ボストン・ポップスは日本側のスポンサーを得て、毎年初夏の日本で公演を続けていました。翌2002年も日本公演が行われて、その前にオーウェン氏から連絡があり、7月17日なら空いているので、是非日本ボストン会のために有志で演奏を行いたい、との申し出の確認がありました。そこで会場の確保、詳細な取決め、プログラムの用意などを進めました。会場は酒井幹事のご尽力で、NEC芝クラブのホールを使うことができました。演奏内容はフレンチホルン奏者4人によるカルテッドで、親しみ易い、楽しい曲目で素晴らしい演奏を披露してくれました。当会の出席者44名は素晴らしい演奏を堪能しました。その後はビュッフェスタイルによるレセプション。楽員たちは皆さん寿司が大好きで、あっという間に無くなってしまいました。そして当会の会員たちとの歓談を楽しんでいただきました。

翌2003年7月も訪日公演があり、オーウェン氏から、日本ボストン会のために再度有志による無償の演奏の申し出があり、17日に実現することになりました。今度は弦楽四重奏4人に、フレ

ンチホルンのカルテット4人の構成による演目となりました。会場は前年と同じNEC芝クラブ。モーツァルトなどの親しみやすい曲目で、聴衆は身近での素晴らしい演奏に感動しました。演奏後の参加者74名によるレセプションでは寿司を大幅に増やし、楽員たちに大変喜ばれました。高名なオーケストラの楽員たちが、特に日本ボストン会のために演奏してくれるとは、稀有のことでしょう。

翌年夏にも再度、日本ボストン会のために演奏してくれる、とのことでしたが、残念なことに、不況により日本側のスポンサーが得られなくなり、以降、来日公演は暫く中止となってしまいました。かくしてボストン・ポップスによる演奏会が、音楽の会の年間主要行事となりかけたのですが、不可能となってしまいました。これで音楽の会の主要な行事はできなくなりましたが、たまたま拙宅を改築することになっていたため、これを機会に自宅でささやかにホームコンサートを開催できるよう設計しました。以降、ボストンで研鑽を積んだ音楽家による演奏会を、ジャズコンサートも含み合計17回、日本ボストン会会員向けにホームコンサートをコロナ禍で中止となるまで続けました。しかし申し訳ないことですが、それも私達の高齢化により、もはや続けることは最早困難になりました。

そうした折にオーウェン氏から、20年ぶりにボストン・ポップスの日本公演が10月に復活するとの連絡が今年の7月にありました。そして日本ボストン会のために、再び有志を募って演奏をしてあげる、との申し出があり、10月9日に目出度く実現することになりました。直彦は骨折によるリハビリ中で動けないため、音楽の会の幹事に新たに就かれた若尾さんと細田会長に事後を委ね、演奏会と懇親会の具体的なアレンジをお願いしました。今回は弦楽器と管楽器の総勢8名による演奏。日本ボストン会30周年記念のメイン行事として、成功裏にコンサートが実施されることを祈ります。これにより日本ボストン会とボストンとの絆が一層深まることでしょう。

My Town Wellesley

Noriko Sakai

I live in the town of Wellesley. It is a sophisticated and beautiful town with rolling hills, lovely landscaped houses, public buildings, parks, college campuses and so on. These are appreciated by the large number of people in the town. Among them The Town Hall, Wellesley Congregational Church and Wellesley Hills Branch Library attract me very much. These are cultural figures and harmonize with the beauty and nature in the town.

Three hundred years ago if the settlers of early colonies along the Indian trail had passed by on their horses, they would have seen only trees and deer. In November, two hundred years ago, when George Washington passed through the area, he saw only farm houses. Soon there would be a big change. He would never have imagined such a beautiful and convenient town as Wellesley today.

The Town Hall stands on the loveliness of lawn and foliage at 525 Washington Street as you enter Wellesley square from the east. It was built in a convenient area and once

served as Wellesley's library from 1882 to 1959. Its commanding position displays lovely features to benefit the structure of the Town Hall that is important for Wellesley. Every citizen can admire and is proud of speaking about it in Wellesley. Family groups enjoy the area surrounding The Town Hall. The French castle-like Town Hall incorporated into mixed design of Baroque, Renaissance and Gothic elements. The whole figure is Gothic style. (Plate 1) The thick mass of unbroken stones with wall buttresses in Gothic order. We find a handsome entrance. The length of the two heavy arms and a porch are equal. The facade of Greek temple-like free standing ionic order column which connects to the towers. The ornament of a doorway and a wall is simple. The radiating roof of the center section and the cylindrical towers with pyramidal roof are in the order of Baroque. Pretty Palladian windows of the side section are pointed out with a small sculpture. It is accented in clean stone wall with a clock on the front.



People gather at Wellesley square, on Washington street where the Wellesley Congregational Church stands. (Plate 2) It shows beautiful proportion and a graceful cupola rising against blue sky. There, people meet with neighbors or friends. They enjoy talking each other and pray to God. There is a sense of community. The church tower looks over us with noble manner. Every citizen admires and is proud of the church building. This church is high Georgian style taken simple form and refined in plan details.



The church is characterized by the addition of a columnar portico on a west entrance. The elegance of the porch is set. The façade is plain with the free-standing columns that support the gallery with simple design. The American "classic" type of Georgian Church is a box-like and two-story building with simple rectangular windows. It is totally Adamesque and very English in style.

Another a beautiful structure, Wellesley Hills Branch Library, is located at 210 Washington street. Every citizen can be proud to study and read here. The town has responsibility to give grace to the people. Its purpose, in colonial period, is for educating people and personal beauty. This library stands beside Washington street on a main road and is close to a residential



section. It is convenient for my family. I often find children with their mothers who are reading fairy tales for them in the peaceful scenery. Wellesley Hills Branch Library shows simple proportion and structures. (Plate 3) It looks like New England stone house or English Gothic church that is a simple rectangular building. A triangular entrance is fashionable with small symmetric window. This building is a simple rectangular structure with massive stone walls, steep roof with pretty classic style cupola and chimney. This extremely simple building fits into the greenery and the residential housing so well.

The Public buildings, The Town Hall, The Church and the Library are situated in a quiet and beautifully landscaped garden area. The structures of these buildings which has cultural beauty impress many visitors.

山田敬蔵さんとの出会い

棚橋 征一

私が初めて山田さんにお会いしたのは1996年の秋でした。自宅のある日野市が随時週末に開催していた「バラエティ・サロン」のチラシに、1953年のボストン・マラソン優勝者として著名な山田敬蔵さんが講演をするとの記載が目にとまったのがきっかけでした。私は1991年～94年まで3年間、ボストンにあったNECの子会社へ出向する機会があり、その間、他の日本ボストン会（BAJ）会員の皆さんと同様、現地で毎年春に開催されたボストン・マラソンに参加する日本の選手を家族と一緒に沿道から応援するという体験をしました。

そんな背景もあり、是非、山田さんのご講演を拝聴したいと思い、市民会館へ出かけました。「マラソン人生と健康」といった演題のお話でしたが、国内外における豊富なレース体験に基づいた、真のスポーツマンらしい面白い内容で、講堂に集まった聴衆から大きな拍手が贈られました。講演終了後、山田さんにご挨拶してBAJのことをお伝えし、「近々、総会があるのですが、ご都合がつかなら、特別ゲストとしてご参加頂けないでしょうか？」と打診したところ、破顔一笑、ご快諾下さいました。また、これを機会にBAJ会員にもなって下さり、その後、何度もBAJの会合に出席しては興味深いお話を下さったのはBAJにとって栄誉なことでした。

かつてメディアが報じたとおり、スポーツマンとしてボストン・マラソンで優勝を飾り、敗戦から間もない日本に大きな勇気を与えたご功績は計り知れないものがあると思います。山田さんは2020年4月に92才でご逝去されましたが、ここに改めてご遺徳を偲び、ご冥福をお祈りする次第です。



「日本ボストン会と私達の15年」

小野田 勝洋・富子

日本ボストン会設立30周年の記念の寄稿の機会をいただき、会との関わりについて記憶を紐解いてみました。

日本ボストン会の発足は1992年です。今年は2023年ですから31年になりますね。

私と家内（私達）の日本ボストン会（BAJ）行事への参加は2008.04.05の千鳥ヶ淵のお花見の会でした。幹事の生田さんがお花見の参加者へ初参加メンバーとして私達を紹介してくださいました。

BAJ発足は1992年です。なぜか私達はBAJの存在を16年間知らなかったことになります。その存在を初めて知ったのは、吉田博さんが「日本ボストン会というのがありますよ。入りませんか？」と教えてくださったからだと思います。そして生田さんがお花見の会の幹事をしていて、私達を誘ってくださったのだと思います。

その後翌年のお花見の会、関さんの音楽の会への参加と私達とBAJの関わりが広がってきました。

今年は2023年、私達のBAJとの関わりは15年間に及び、その関わりにより私達の暮らしは充実し、豊かなものとなりました。

私達はボストンに1972年に赴任し、1979年に日本に戻ってきました。NECがハネウエル社とコンピュータの共同開発を行うことになり、現地ボストンにNECシステム研究所という現地会社が開設されました。その時から私達はボストンに住み、暮らすことになりました。これはBAJの発足の20年前のことでした。米国独立200年祭が独立戦争スタートの地ボストンで賑やかに行われました。そして私達の子供二人がボストンで生まれ育ちました。

BAJに参加してからはBAJにお世話になるだけではない、私達も積極的にお手伝いしなくてはと考え、幹事会に参加させていただき、お花見の会幹事を生田さんと一緒に務めることになりました。また、関さんの音楽の会のお手伝いもさせていただくことになりました。

家内や娘とともに会報への寄稿もさせていただきました。会報が電子化され、ホームページ（HP）に掲載された際に、俣野さんが会報担当だった時代に紙会報で出された会報もHPに掲載されれば、当初からのBAJの活動が誰にでも読めるようになる、これは大事なことだと考え、紙会報をスキャンしてpdf文書化し、HPに掲載することを幹事会に提案し、賛同を得て俣野さんとともにその作業を行いました。HP担当の吉田博さんのご尽力を得て、紙会報もその全ての内容をHPに掲載することができました。

BAJの活動の記録も大切なことと考え、活動記録を整理して冊子にし、関係者で保存することを行いました。

お花見の会と音楽の会は発足から現在までの経緯をそれぞれ冊子にまとめました。BAJの活動の歴史もHPを参考にまとめた冊子を作りました。

一泊旅行や日帰り旅行の記録も写真中心の冊子にしました。2015年の尾瀬旅行、同じく奥入瀬・十和田・角館旅行、2017年のアプトの道・霧積温泉旅行、2018年の青もみじの京都旅行、同じく越後湯沢旅行は一泊旅行です。日帰りでは2018年の鎌倉紅葉散策、2019年の油壺エデンの園・城ヶ島散策、同じく小石川後楽園紅葉狩り、2020年の港七福神巡り、そして中埜さん作成の2019年柴又七福神めぐりがあります。これら冊子の写真は土居さん・中埜さんにも沢山ご提供いただきました。

旅行は楽しかったですね。忘れられない沢山の思い出に彩られています。

BAJ関連のイベントとして「盆石の会」が2019年に会員有志により開催され、その冊子も作成しました。

幹事会・総会・シニア会・映画の会・レクチャーシリーズとBAJは私達のシニアライフに鮮やかな彩を添えてくれました。この会に入って良かったとの思い強く、心から感謝申し上げ、また新体制によるBAJの新しい活動に期待し、筆を置きます。

寄稿

道井 郁子

ボストンには2016年秋から約3年過ごさせて頂きました。四季の移ろいを身近に感じながら、美術、音楽といった文化や世界最高のアカデミックな環境が街の一部となっている、そのような恵まれた環境で過ごすことができ、とても勉強になりました。またボストン周辺で活躍されている日米や各国の素晴らしい方々とも触れ合いの場を持たせて頂き、交流の大切さも切に感じました。マサチューセッツをはじめニューイングランド地方と日本との歴史的な繋がりを知り、先達の方々の足跡を辿るように其々の地を訪れたことも大切な思い出になっております。日本に戻りまして、繋がりを保てないものかと思っておりました際に、日本ボストン会のことをご紹介いただき早速会員にならせて頂きました。

ボストンに縁のある方々が日本とボストンとの繋がりを紡ぎ、この度30周年を迎える歴史あるこの会に参加させて頂いていることをとても有り難く存じております。この会の活動がこれからも広がっていくことを祈念申し上げますと共に、微力ながらお役に立てればと存じております。



思い出の地：マウント・オーバン墓苑

三好 彰

ハーバードの町はずれにマウント・オーバン墓苑がある。1831年に創設されたアメリカで最初の公立墓苑である。ジェイコブ・ビゲロウが寄贈した礼拝堂が迎えてくれる。氏の甥のスタージスは、ボストン美術館に5万点を超える美術品を寄贈したことはよく知られている。苑内にビゲロウ家の墓があるが、仏教徒だったスタージスは分骨されて天津市の法明院に眠っており、山口静一会員の案内でボストン会で見学した。

墓苑には樹木が覆い茂っていて春は花々が咲き誇り、秋には見事な紅葉が楽しめる。ニューイングランド最大の大木が17本ある。そのうちのケヤキやニッコウモミジなど5本が日本原産である。ハーバード大でジェイコブ・ビゲロウの指導を受けたジョージ・ホール医師は幕末の横浜居留地に長く住んだ、そして日本から持ち帰った木々をハーバードの樹木園に寄贈した。それらがアメリカに持ち込まれた最初の日本の樹木とされているが、同園のより大きな樹がこの墓苑にあるので、これらもホール医師が持ち帰ったのだろう。

墓苑を巡るツアーが行われる。詩人ロングフェローのツアーに参加したことがある。息子のチャールズは明治初年に3年も日本で暮らした。そして日本の美術品を多数持ち帰ってことで知られている。そんなことを思い出しながら歩いているうちに道に迷ってしまった。自然を生かしたせいであろうが道は曲がりくねっていて迷路のようである。それで遅刻したのだが大きな拍手の音が聞こえて場所が分かった。このツアーはロングフェローにゆかりの人のお墓を巡ったが、その一人が地球に氷河期があったことを解き明かしたことで有名なアガシー教授だった。ロングフェローは教授の50歳の誕生日を祝う詩を作っていた。

ジョセフ・ヒコ（後年の浜田彦蔵）が幕末にアガシー教授に出会っていた。実はジョン万次郎の10年遅れのことになるが、ヒコの乗っていた船が漂流した。幸いにアメリカの船に救助されてサンフランシスコに連れて行かれた。それからも紆余曲折があったがヒコはサンフランシスコで働くようになった。その会社のトーマス・キャリー社長の姉エリザベスがアガシー教授夫人だった。社長のお墓もここにある。

ジョン万次郎といえば帰国の際にアメリカで広く読まれたボーディッチ著の航海学書を持ち帰ったが、そのボーディッチの銅像があり、お墓もある。万次郎は帰国後にこの本を翻訳した。刊行されなかったが写本が東北大学に残っていてインターネットで公開されている。それを読んでわかったが、新島襄がその一部をノートに写し取っていた。なお新島襄は外国に行くことがご法度だった幕末にひそかに海を渡ってボストンに来た。その心意気を知った富豪ハーディの庇護を受けて、勉学に励み日本人として初めてアメリカの学位をとった。ハーディの墓地もここにある。

そのほかにも日本に関係する方のお墓がある。同好の諸氏に話を広げていただければ幸いである。

日本ボストン会30周年に寄せて

細田 満和子

この度、日本ボストン会が30周年を迎えるという大きな節目の年に、会長という重責を担うことになり、とても身が引き締まる思いであります。30周年に寄せた文章を依頼され、さて何を書こうかと考えたところ、本会に入会してからまだ7年足らずで30年の総括をするには十分な知識がないため、2023年10月9日に開催されました日本ボストン会30周年記念ボストンポップス・コンサートを中心に書かせていただきます。

コンサートには、参加者50名、演奏者含めて58名の皆様が集いました。2日前に、東京フォーラムの5000人収容大ホールを満席にするボストンポップスのコンサートに行ってきたばかりだったので、こんなに近くでメンバーの演奏が聴けるとは夢のようでした。ご参加の皆様も、「間近で素敵な音楽が聴けて感動した」、「音の振動が伝わるほどだった」と、とても喜んでいらっしゃいました。

飲食を伴う交流会では、演奏家との歓談や、参加者同士のボストンでの思い出話に花が咲きました。ボストンポップスも皆さんも、「楽しんで演奏できた」、「ここに来られて光栄だった」、「大きなホールではお客さんと触れることがないので交流できて良かった」とおっしゃっていました。

後日、有志代表のケビンさんからは、次のようなメールが届きました。拙訳での抜粋を記します。

「日本ボストン会で演奏することをずっと楽しみにしていました。そして演奏を終えた今、とてもいい思い出になりました！私の仲間の音楽家達はほとんど、今回が初めての来日でしたが、コンサートの後、また日本に来ることがあれば、日本ボストン会で演奏したい、と言っていました。きっと日本に来る機会はあると思いますので、是非、日本ボストン会でのコンサートの時間を作りたいと思います。」

聴衆だけでなく演奏家の皆様にも楽しんでいただけた素晴らしい会を開催することができ、本当に良かったです。

この会の実現のためには、多くの方々のご協力がありました。2003年にボストンポップスをお迎えしたコンサートを実施した際の資料一式をお送りくださった関様、日程の都合で休館日にもかかわらず会場（NEC芝倶楽部）を借りることに口添えくださった酒井様には、心からお礼を申し上げます。

そしてボストンポップス・コンサート実行委員の皆様には、なんとお礼を申してよいか分かりません。会場手配や会計を一手に引き受けてくださった滝沢様、事務一般を遂行してくださった別府様、ケヴィンさんとの連絡役を務めてくださった若尾様、適宜準備に関わり当日の司会進行をしてくださった道井様、全体の流れを把握して適宜アドバイスをくださった八代様、本当にありがとうございました。皆様の協力がなかったらこのコンサートは成立しませんでした。他に

も、当日譜面台を持参して下さった関様の奥様、若尾様のお母様、受付を手伝って下さったIAFAの馬場様にも深く御礼を申し上げます。

私たちの試行錯誤を暖かく見守って下さり、当日の乾杯のご発声をして下さった土居前会長、様々な角度から適宜助言や支援をして下さり中締めのお挨拶をして下さった近藤元会長には、沢山のことを教えて頂き、かつ助けて頂きました。本当にありがとうございました。

後援して頂きました、ボストン日本商業会（JBBS）、インクルーシブ・アクション・フォー・オール（IAFA）、ボストン日本祭り、各団体様にも感謝いたします。

本来こうしたお礼はコンサートの冒頭の会長挨拶で申し上げたかったのですが、タイトなスケジュールの為、挨拶はできるだけ短くすることと釘を刺されておりましたので（笑）、割愛させていただきました。この場をお借りして御礼を述べる事が出来て嬉しく思います。

このコンサートイベントを通して改めて気づいたことがあります。それは、本会はボストンと関わりがあった日本在住の方々にとってだけでなく、ボストンの方々にとっても大事な会なのだということです。このことはボストンポップスの皆様に教えて頂きました。

日本ボストン会の定款には、「会員相互の親睦と交流を計ると共に、我が国と歴史的にも関係の深いニューイングランド地方との交流を促進し、日米友好の促進に寄与することを目的とする」とあります。この文言の通り、今までの30年、先人の皆様は日米友好にご尽力されてこられました。それを受けて、これからもボストンを含むニューイングランドの皆様との交流を続け、日米友好のため、ささやかながら貢献していければと思います。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

歴代会長（代表幹事）と任期

1992年～1994年	吉野耕一	1994年～1996年	井口武夫
1996年～1998年	藤崎博也	1998年～2000年	高木政晃
2000年～2002年	茂木賢三郎	2002年～2004年	井口武夫
2004年～2006年	佐々木浩二	2006年～2008年	鶴正登
2008年～2010年	山村章、鶴正登	2010年～2012年	法眼健作
2012年～2014年	長島雅則	2014年～2016年	佐藤信雄
2016年～2018年	藤盛紀明	2018年～2020年	近藤宣之
2020年～2022年	土居陽夫	2022年～2024年	細田満和子

歴代幹事（2023年9月22日現在）

幹事 生田英機、顧問 井口武夫、幹事 岩田衛、幹事 岩田加奈子、幹事 小野田勝洋、幹事 小野田富子、幹事 金子佳生、幹事 金子邦子、幹事 神部信幸、幹事 神部美佐子、幹事 北原秀治、幹事 久米生光、幹事 幸野眞士、幹事 幸野佳子、顧問 近藤宣之、幹事 近藤百合子、幹事 酒井一郎、幹事 酒井典子、顧問 佐々木浩二、幹事 佐藤達夫、幹事 佐藤花子、顧問 佐藤信雄、幹事 佐藤文則、幹事 篠崎史郎、幹事 篠崎和子、幹事 柴柳健一、幹事 柴柳美佐、幹事 関直彦、幹事 関尚子、幹事 関場誓子、幹事 當間秀雄、幹事 當間きよみ、顧問 高木政晃、幹事 高木令子、幹事 高野忠義、幹事 高野全世、幹事 滝沢典之、幹事 田中英俊、幹事 棚橋征一、幹事 筒井健作、幹事 筒井弥生、顧問 鶴正登、副会長 鶴経子、顧問 土居陽夫、幹事 土居嘉子、顧問 長島雅則、幹事 長谷真司、幹事 中埜岩男、幹事 中埜紀子、幹事 西川文夫、幹事 西川絹子、顧問 藤崎博也、顧問 藤盛紀明、幹事 藤盛富美子、幹事 別府雅道、顧問 法眼健作、会長 細田満和子、副会長 俣野善彦、幹事 俣野真由美、幹事 水野賀弥乃、幹事 道井郁子、幹事 三好彰、幹事 三好美智子、顧問 茂木七左衛門、副会長 八代江津子、幹事 柳沢幸雄、幹事 山崎恒、副会長 山崎規矩子、顧問 山村章、幹事 吉田博、幹事 吉田貴幸、顧問 吉野耕一、幹事 吉野静子、幹事 米田隆一、幹事 若尾美絵、幹事 和田章

日本ボストン会・簡易年表

1992年（平成4年）

- 10月30日 東京工業大学大岡山キャンパス100年記念館で設立準備委員会開催
日本ボストン会誕生、初代表幹事に吉野耕一氏就任

1993年（平成5年）

- 4月30日 会報1号発行
- 6月11日 第1回レディース会「講演と音楽の夕べ」が青山のアンダンティーで開催
（講演：柳沢幸雄氏、ピアノ演奏：松岡英子氏）
- 10月18日 第1回総会開催（NEC三田ハウス芝倶楽部にて）

1994年（平成6年）

- 1月22日 第1回歴史を飲もう会、泉三郎先生訪問（八王子・料亭「美さき苑」）
- 5月17日 ボストン桜の木記念植樹10周年に桜の苗木寄贈
- 10月21日 第2回総会、代表幹事に井口武夫氏就任
- 11月 日本語学校、ポーツマス・ウェントワースの白露戦争ゆかりのホテルへの寄付
- 11月19～20日 ボストンの先生ホームステイ受け入れ（酒井氏）

1995年（平成7年）

- 5月12日 第1回ゴルフの会開催
- 11月2日 第3回総会

1996年（平成8年）

- 6月29～30日 ハイキングの会 尾瀬一泊ハイキング
- 10月25日 第4回総会 第3代会長に藤崎博也氏就任
- 11月16～17日 ボストンの先生ホームステイ受け入れ（藤盛・近藤・土居氏宅）

1997年（平成9年）

- 4月4日 第1回お花見の会（千鳥ヶ淵）
- 10月24日 第5回総会
- 11月8～9日 ボストンの先生ホームステイ受け入れ（酒井・村上・新名氏宅）

1998年（平成10年）

- 1月31日 歴史を飲もう会 岡倉天心「六角堂1泊ツアー」（茨城県五浦海岸）
- 11月7～8日 ボストンの先生ホームステイ受け入れ（肥田木・佐藤・土居氏宅）
- 11月13日 第6回総会 第4代会長に高木政晃氏就任、ボストンより里帰りツアー一行参加

1999年（平成11年）

- 7月10～11日 第1回美術の会 名古屋ボストン美術館訪問
- 11月12日 『日本・ニューイングランド交流の記録』出版
- 11月12日 第7回総会
- 12月4～5日 ボストンの先生ホームステイ受け入れ（最終）（岡崎・西川・御子神氏宅）

2000年（平成12年）

- 11月10日 第8回総会 第5代会長に茂木賢三郎氏就任

2001年（平成13年）

- 4月8日 お花見の会（千鳥ヶ淵）、ボストンより「いこいの場」里帰りの方々参加
- 7月14～15日 美術の会 名古屋ボストン美術館訪問～名古屋市内・トヨタ産業記念館見学
- 11月16日 第9回総会

2002年（平成14年）

- 7月13～14日 歴史を飲もう会 北海道ツアー・北海道マサチューセッツ協会訪問（札幌）

- 7月17日 音楽の会 ポストンポップスミニコンサート（会場：NEC三田ハウス芝倶楽部）
- 10月 6日 日本ポストン会ホームページ公開
- 11月15日 第10回総会、第6代会長に井口武夫氏就任

2003年（平成15年）

- 5月31日～ 6月1日 美術の会 名古屋ポストン美術館と明治村訪問
- 7月17日 音楽の会 ポストンポップスエスプラネードオーケストラコンサート
（会場：NEC三田ハウス芝倶楽部）
- 9月21日 歴史を飲もう会 浜離宮恩賜庭園と隅田川クルーズ
- 11月14日 第11回総会
- 12月 7日 紅葉狩りの会 紅葉狩り予行調査（新宿御苑）

2004年（平成16年）

- 10月30日 音楽の会 コンサートのタベ 芸術の秋+食欲の秋（会場：日本外国特派員クラブ）
- 11月12日 第12回総会（NEC三田ハウス芝倶楽部）、第7代会長に佐々木浩二氏就任
- 11月28日 第1回紅葉狩りの会（新宿御苑）

2005年（平成17年）

- 3月 ポストン日本協会創立100周年を祝い記念品を贈る
- 5月14日 山の会・ハイキングの会合同 丹沢・大山と豆腐の会
- 5月28～ 29日 美術の会 名古屋ポストン美術館訪問と愛知万博見学
- 11月11日 第13回総会
- 11月27日 第1回油彩・水彩を描く会 紅葉を描く会（六義園）

2006年（平成18年）

- 3月10日 会報第27号発行、『ポストンからのご挨拶』増淵興一
- 11月 7日 第14回総会、第8代会長に鶴正登氏就任

2007年（平成19年）

- 5月24～25日 美術の会・歴史を飲もう会合同 新緑の古社寺めぐり（大津-湖都の路）
- 11月22日 第15回総会（NEC三田ハウス芝倶楽部）
- 12月 2日 ハイキングの会・油彩水彩を描く会・紅葉狩りの会合同 猪鍋を食う会（鐘が岳）

2008年（平成20年）

- 9月 8日 カラオケの会発足（新宿京王プラザホテル）
- 9月11日 油彩・水彩を描く会解散（第62回幹事会）
- 11月13日 第16回総会、第9代会長に山村章氏就任
（任期途中の退任により鶴正登氏が残期間を担当）

2009年（平成21年）

- 4月26日 美術・歴史を飲もう会合同 茂木本家美術館訪問ともの知りしょうゆ館見学
- 5月16日 音楽の会 新緑ホームコンサート開催
- 11月13日 第17回総会（NEC三田ハウス芝倶楽部）

2010年（平成22年）

- 2月14日 社会貢献の会「一繕乃会」発足
- 9月22日 伝統芸能の会「発足
- 10月 3日 ハイキングの会・山の会合同 目黒駅周辺散策開催
- 11月 6日 美術の会・歴史を飲もう会 国立西洋美術館の建築見学会開催
- 11月19日 第18回総会 第10代会長に法眼健作氏就任
- 12月25日 伝統芸能の会 「仮名手本忠臣蔵」鑑賞（国立劇場）

2011年（平成23年）

- 1月23日 音楽の会 初のジャズ・コンサート開催
- 1月28日 「美術の会」と「歴史を飲もう会」との合併が承認され、「美術と歴史の会」が発足
- 4月26日 Fish夫人を囲む昼食会開催（3/11日の東日本大震災復興支援にて来日に関連して）
- 11月18日 第19回総会
- 2012年（平成24年）- ボストン会20周年
- 11月18日 第20周年記念式典&総会・懇親会、11代会長に長島雅則氏就任
- 2013年（平成25年）
- 11月15日 第21回総会
- 2014年（平成26年）
- 5月20日 美術と歴史の会 茨城県五浦(イズラ)バス旅行（岡倉天心ゆかり地茨城六角堂）
- 10月10日 会報第42号発行、会報が電子化される
- 11月14日 第22回総会（NEC三田ハウス芝倶楽部）第12代会長に佐藤信雄氏就任
- 2015年（平成27年）
- 6月28・29日 ハイキングと山の会 尾瀬ヶ原1泊2日のハイキング
- 10月16-18日 紅葉狩りの会（奥入瀬・八幡平・角館武家屋敷他ツアー）
- 11月20日 第23回総会
- 2016年（平成28年）
- 1月10日 ハイキングと山の会「東海七福神めぐりハイキング」実施（第1回七福神めぐり）
- 11月18日 第24回総会・懇親会（NEC三田ハウス芝倶楽部）第13代会長に藤盛紀明氏就任
- 2017年（平成29年）
- 5月10・11日 美術と歴史の会「山口先生(当会員：埼玉大学名誉教授と巡る奈良1泊旅行」実施
- 9月27日 世界遺産・国立西洋美術館建築ツアーと東京都美術館で
「ボストン美術館至宝展」鑑賞
- 11月27日 第25回創立25周年総会
- 2018年（平成30年）
- 4月04日 お花見の会「屋形船（浜田屋）乗船による隅田川の花見」実施
- 5月30・31日 美術と歴史の会「京都旅行：1泊旅行」実施
- 10月25・26日 ハイキングと紅葉狩りの会「越後湯沢 紅葉・温泉・酒の旅」1泊2日実施
- 11月07日 プログラム委員会ドキュメンタリー映画上映会「PAPER LANTERNS：灯籠流し」
(会場：城西国際大学)
- 11月26日 第26回総会、第14代会長に近藤宜之氏就任
- 2019年（平成31年・令和元年）
- 11月26日 第27回総会
- 12月03日 プログラム委員会 ドキュメンタリー映画上映会「UNREST」(大妻女子大学)
- 2020年（令和2年）- コロナ感染拡大、行動制限開始
- 1月13日 伝統芸能の会 歌舞伎演鑑賞会開催（国立劇場）
- コロナウイルス予防のための緊急事態宣言で春のイベントは中止(延期)
- 11月26日 第28回総会(Zoomによる開催) 第15代会長に土居陽夫氏就任
- 2021年（令和13年）
- 9月25日 レクチャーシリーズ第1回「40歳から9年間のボストンへの駐在から；
これから海外駐在に直面する人へのアドバイス」（講師：近藤宜之氏）
(Zoomによる開催)
- 11月16日 第29回総会（NEC三田ハウス芝倶楽部にてコロナ5波と6波の合間に対面で）

- 12月18日 レクチャーシリーズ第2回 「日本ボストン会の成り立ち」 (講師：藤盛紀明氏)
(Zoomによる開催)
- 2022年 (令和4年)
- 3月19日 レクチャーシリーズ第3回 「日本人学生会を飾る人々」 (講師：三好彰氏)
(Zoomによる開催)
- 5月 「美術と歴史の会」 閉会宣言[美術と歴史の会] 閉会
- 6月18日 レクチャーシリーズ第4回 「ナンタケットバスケット 歴史と伝統」
(講師：八代江津子氏)
(Zoomによる開催)
- 9月17日 レクチャーシリーズ第5回 「77年周期の日本の近現代」 (講師：柳沢幸雄氏)
(Zoomによる開催)
- 11月5日 第1回シニア会開催 (会場：東京三田倶楽部)
- 11月14日 第30回総会 (ハイブリッド形式で対面とZoom併用)
第16代会長に細田満和子氏就任
- 2023年 (令和5年) - コロナ5類移行、行動制限の解除 - 30周年
- 3月26日 お花見の会最終回 (小田原城址)
- 4月22日 レクチャーシリーズ第6回 「日本の科学技術はダメなのか？」 (講師：辻篤子氏)
(Zoomによる開催)
- 8月19日 レクチャーシリーズ第6回 「ボストンとの交流 香の道具に導かれて」
(講師：畑正高氏)
(Zoomによる開催)
- 10月9日 ボストンポップス・エスプラナード・オーケストラ有志によるスペシャルコンサート
(会場：NEC三田ハウス芝倶楽部)
- 10月22日 伝統芸能の会「初代国立劇場さよなら特別公演：近松半二＝作 通し狂言
妹背山婦女庭訓 三幕四場」 (会場：国立劇場)
- 11月27日 第31回総会 (日本ボストン会30周年イベント) (会場：NEC三田ハウス芝倶楽部)

この他各ワーキンググループでは年1、2回のイベントを開催してきました。詳しくは日本ボストン会ホームページの活動年表を参照ください。